

徳川宗春　　△江戸Vを超えた先見力

八代将軍吉宗や九代家重が宗春を大切にしたりした傍証

—— 松平武元に関する雑考 ——

高家寺　北川宥智

松平武元。正徳三年十二月十八日(1714年2月2日)に水戸徳川家御連枝(分家)の常陸府中藩第三代藩主松平頼明の次男として生まれる。享保十三年(1728年)七月に上野館林藩五万四千石第二代藩主松平武雅の養嗣子となり、同年九月に家督を相続。陸奥国棚倉に移封されたが、八代将軍吉宗に見出され、元文四年(1739年)に九月に奏者番に就任。この年の一月は養父武雅の実家の四谷松平家の本家である尾張藩第七代藩主徳川宗春(武雅の従兄)が強制的に隠居させられている。吉宗の覚えめでたく、延享元年(1744年)五月には寺社奉行を兼帯。延享二年(1746年)五月には徳川家治付き西丸老中となり、元の領地である上野国館林に国替される。延享四年

(1747年) 九月には西丸老中から本丸老中に転じ、宝暦十一年(1761年) 五月に老中首座となっている。明和六年(1769年) 十二月には七千石が加増され、都合六万一千石の領地となる。安永八年七月二十五日(1779年6月5日) 逝去。享年六十七歳。院号は天韶院。

越智松平家は、六代將軍徳川家宣の実弟である松平清武を藩祖とする親藩である。清武は六代將軍の異母弟であるにもかかわらず、七代及び八代將軍継承の候補から外された。官位は従四位下右近將監侍従。清武は、生まれて間もなく父の御両典甲府宰相徳川綱重(三代將軍家光の次男)の家臣である越智喜清に養われ、延宝八(1680)年にその家督を継いでいた。しかし、兄の家宣が將軍後嗣となったことで、宝永四(1707)年正月二日上野館林に二万四千石で封じられた。館林は元々は五代將軍綱吉が御両典であったころ二十五万石で封じられていた場所である、しかし綱吉の子であった徳松が五歳でなくなつた後は城郭も破却されていた。清武は従四位下出羽守となり一般大名より上位となり伺候席も大広間となる。綱吉が薨去した宝永六(1709)年に侍従となり一万石を加増。正徳二(1712)年に兵部大輔侍従となり年末に五万四千石となった。翌年には右近將監侍従。將軍の弟であり、三代將軍家光の直径の男子であるにもかかわらず、その官位は尾張藩と水戸藩の御連枝に準じられている。最終的には御連枝が昇進できる近衛権少將にさえ昇進していない。館林藩は城郭が破却されていた

ためにその債権のために税を課した。そのために藩政はうまくいかず、享保三(1718)年には強訴が起きている。農民が江戸藩邸に強訴し年貢は半減されたが田谷村・中谷村・名主の三人が斬首された。これを館林騒動という。実子清方が享保九(1724)年に二十七歳で早世したために、尾張藩御連枝で美濃高須藩主であった四谷松平撰津守義行の実子武雅を養嗣子とした。

美濃高須藩では、武雅が生まれる前に尾張三代藩主綱誠(義行の同母兄)の子義孝(宗春の異母兄)が養嗣子に入っていた。そのために、武雅は親藩の越智松平家に養子に入った。義行の母徳川千代は三代將軍家光の長女。つまり武雅は家光直系の曾孫。一方、松平清武は家光直系の孫。どちらも三代將軍家光の直系の子孫である縁戚関係もあつたためと考えられる。武雅は尾張藩主となる四代徳川吉通・六代継友・七代宗春兄弟の従弟。武雅は享保九年に越智松平家を相続するが享保十三年(1728)年に二十七歳で逝去してしまった。逝去の二ヶ月前に水戸藩御連枝府中藩松平播磨守頼明の子である武元が武雅の養嗣子となっている。武元の実父松平頼明は宗春が隠居謹慎する際に尾張藩に正式な使者として赴いた三人のうちの一入である。

武元は、十六歳で家督相続の直後に館林から陸奥棚倉に藩を移されてしまう。しかし、その有能さが八代將軍吉宗の目に止まり、親藩大名でありながら元文四(1739)年に奏者番となった。江戸時代は一般的に親藩の大名は役職に就かないが、越智松平家

三代目である松平武元は例外であった。將軍家に連なる家柄でありながら最終的には宿老(老中)として徳川幕府の屋台骨を支えた。武雅以降の伺候席は従五位下であり、譜代大名が詰める帝鑑間であった。大名は、従四位下に昇叙すると大大名の詰める大広間が伺候席なる。越智松平家は、御家門でありながら譜代の臣として、幕府の要職を担うこととなる。

武元の官職は、先祖と同様に右近衛將監であったが、一年だけ主計頭であった時期がある。八代將軍吉宗が九代將軍家重に將軍位を譲る前後のことである。この重要な時期に武元は松平主計頭と名乗った。松平主計頭、この名は尾張七代藩主徳川宗春が十五年に渡り名乗った名前。吉宗とつても、家重にとつても松平主計頭は宗春を想起させたはずである。何故に、武元に主計頭を名乗らせたのであろうか？

武元は延享元(1744)年に奏者番と寺社奉行を兼務した。翌(1755)年五月二十八日に松平主計頭となる。七月七日の五節句七夕の日に將軍讓位が宣言され、九月に家重の側近である西丸老中酒井忠恭が本丸老中へ異動となり老中首座となった。十月、吉宗は西之丸に入り隠居、家重が徳川宗家を継ぎ九代將軍となる。その数日後の十月八日に、宿老として享保八年から二十年に渡り幕閣を主導した松平乗邑が突然と罷免されてしまう。これは將軍宣下の直前であり、家重はよほど腹に据えかねていたようである。家重の弟の田安徳川宗武を將軍位につけるべく動いたことが要因であったとも

言われるが、『徳川実紀』によれば久しく専横があり、吉宗の諫言にも耳を貸さなかつたともされている。十三日、松平主計頭武元は將軍宣下の乱箱を受け取ることを命じられ、十一月二日の將軍宣下の儀式の際に大任を果たしている。

閏十二月二日、宗春の実子で尾張八代藩主宗勝の養女となっていた勝子（頼姫）が内大臣近衛内前に嫁ぐ許可が降りた。謹慎させられている者の実子が将来関白を約束されている五摂家筆頭の近衛家に嫁ぐことが許されたのが、家重の將軍宣下直後ということも注目される。内前はこの許可の直後に右大臣に昇進している。翌延享三（1746）年五月十五日、家治付きの宿老であった西尾隱岐守忠尚が家重の宿老となったことで、その後継として松平主計頭武元が家治付き宿老（西之丸老中）となり、官職も元の右近將監に戻っている。

ちなみに吉宗が將軍就位の儀式において、部屋住みの宗春（当時は松平通春）に従五位下主計頭を朝廷に推挙したのは、ほかならぬ吉宗であった。そして吉宗みずから將軍就任儀式に出席させている。

家重が將軍位を継ぐという重要な儀式に奏者番として大任を果たし、その時期に宗春の名である松平主計頭を名乗った松平武元。延享四（1747）年には家重の宿老となり宝暦十一（1761）年に九代將軍家重が薨去すると老中首座となって、そのころ御側御用取次であった田沼主殿頭意次とも連携し家治を支えた。

武元は宗春との直接的な関係は見いだせない。しかし、尾張藩の縁戚であったことには間違いない。しかも宗春の若き日と同じ名前を名乗るなど、吉宗と家重が武元と宗春が重なる何かを感じていた可能性が高い。すなわち、吉宗も家重も、宗春を本当は高く評価していたにも関わらず、松平乗邑たち幕閣の思惑と朝廷と幕府の対立などにより、やむを得ず宗春を隠居させざるを得なかったとも考えられる。

ここに記したのは、傍証であり、あくまでも可能性である。しかし、松平主計頭という名が、吉宗就位時には宗春が、家重就位時には武元が名乗っていたというのは、理由もなく偶然であるとは考えられない。武元は宗春の従弟の養嗣子である。吉宗も家重も、松平主計頭は宗春の名であったことは重々承知していたはずである。しかも、家重の嫡男竹千代に、家治という「はる」の同音異字を用い、武元は田沼意次とともに宗春が用いた規制緩和政策を用いていた。

松平武元という存在も宗春を説明するためにも重要な人物のようである。

以下、『徳川実記』による